第6回　国際日本学講演会

「研究」と歩き回る
―日本文学からあちらこちら―

2023（令和5）年5月20日（土）
オンライン開催
講師：森暁子氏（十文字学園女子大学）
司会：神田由築（お茶の水女子大学）

〈第６回国際日本学講演会（2023年５月20日）講演記録〉

「研究」と歩き回る
―日本文学からあちらこちら―

十文字学園女子大学・専任講師　森　　暁　子*

森　本日こちらで話すことになりました、森と申します。よろしくお願いいたします。今、神田先生からご紹介いただきましたが、若くもないし、偉くもありません。お気軽にお聞きいただければ幸いです。神田先生は私の恩師の一人でして、今回こんなどうでもいいような者が呼ばれたのは、おそらく暇な人がいなかったからだと思うのですが、十分に肴にしていただければと存じます。

今日は「研究と歩き回る―日本文学からあちらこちら―」というタイトルです。これもいろいろ協議の末、これに落ち着いたのですが、募集をかけていただいたポスターを見ましたら、こう書いてあったんですね。「日本近世文学を中心に武士から怪談、和歌から和菓子と幅広いテーマに触手を伸ばす」、それはそうなのですが、「本学卒業生の森暁子『先生』」、これは昔の仲間から先生呼ばわりされるのイヤですね…、「から、研究の旅を歩きつづけるコツを教えていただきたいと思います」というのですが、コツを私はあんまり知らず、お聞きしたいぐらいです。推測される今日の催しの狙いは、全然キラキラ系じゃない研究者の一例として洗いざらいさらけ出してこいという古巣の意図だと思いますので、臆面もなくこれからお話しさせていただきます。何か気になることがありましたら、終わった後、何でもお聞き下さい。

では、スライドの２に参ります。どうでもいいと思いますが、私、このような程度の者です。相模国の小田原出身で生年はこちら…もうこの時点で若くないでしょう。あと、本の虫ですね。これは昔からなんですけれど、本の虫。本当の虫は嫌ですね。古典籍を、私たち研究者は、いっぱい持っております。特に近世文学の研究者はいっぱい古い本を持っていて、私は400年ぐらい前のものから持っているのですが、これを好きに食い荒らすのは、実は本の虫として有名なシミじゃなくて、シバンムシなんですね。虫嫌いな人、ごめんなさい。某製薬会社のホームページに載っていた画像を紹介しますが、湿気大国日本、この小粒の小豆みたいな虫が油断するとウジャウジャ湧いてくるので、虫には毒性の強いお香に本を漬け込み、たまに見かけたその時は躊躇なくぶち殺して、罪を重ねて生きております。

98年、お茶大に進学いたしました。お茶大の皆さんはご存じと思いますが、幼稚園から卒業、または、院までずっとお茶大で過ごす方、そういう方は「お茶漬け」と言いますね。この頃、そういう友人もここでできました。でも、気が付いたら、自分が修士までそのまま進学しちゃいまして、ある日、大学入学時に「お茶漬けなんだね」とからかった友達から、「森さんのほうがもう私よりお茶漬け歴、長くなったよね」と、逆襲されました。もう「出がらし」です。

そのまま進みまして、2011年、学位を取得しました。私たち文学系の博士を取る人は結構時間がかかりまして、一応博士課程は３年なのですが、通常の３年、休学で３年、復学して３年で、合計９年まで在籍することができます。私は結局８年目で出ました。この辺は人によりいろいろで、計画的にすぐ出る人もいれば、目いっぱい時間を使っていいものを書こうという人もいます。実は

学位を取った後が大変で、長い就職活動に入ります。これもすごくできる人、運がいい人とか、あと、コネがある人、これは職にありつくのが早いのですが、私はそういうものが一切なかったため、ずっと就職活動を繰り返しておりました。この間もお茶大には何だかんだ仕事でずっとおりましたので、いわゆる高学歴ワーキングプアを続けながら、ひたすらお茶漬け歴を深めておりました。

今年です。十文字学園女子大学の講師に、やっと着任できました。お茶大、抜けたぜ！　と思ったのですが、実はこちらの女子大学の創立者の十文字こと先生、この方はお茶大の前身の、女高師の出身でいらっしゃいます。なので、気が付いたら、まだお茶漬け絶賛継続中な感じになっております。右上に載せたのは、十文字のマスコットキャラのプラスちゃんです。今かわいい顔してますけど、目を開けると、中にプラスの模様が入っていて、よく見るとうっすら怖い…こういう子がキャラクターの学校に今は勤めております。

一応これもそっと載せておきましたが、これは江戸時代の古川柳です。「先生と呼ばれるほどの馬鹿でなし」、意味分かりますよね。これは政治家とか、それこそ学校の先生も、自戒を込めて思わなきゃいけないところなんですが、先生、先生、言われる人は、いい気になってちゃいけないよと。それは相手がおだてているだけだ、あるいは、腹の中では馬鹿にしているんだから、そんなのに乗っかって、いい気になってちゃ駄目だよ、それこそ馬鹿になっちゃうよって話です。下積みが長かったので、先生呼ばわりは大の苦手なのですが、今回の催しのやりとりで、昔の仲間やら友達やらがしれっと「先生」と、メールでよこしてきたので、嫌だなと心底恨んでおります。ついでに、今日見に来ている同級生は絶縁だと思って下さいね。

こちらの私信はいいとしまして、次にスライドの３に移ります。これも全然ご興味ないと思いますが、一応こんな人生を送って研究者に至りましたよということで、ご紹介しておきます。まず、読書家でした、すごく。あと、これは自称ですが、勉強はしていたほうでした。成績は高校でも上位を取っていました。かつ、徘徊者ですね。あちこちをふらふら、いろんな意味で彷徨っておりました。今よく思うのが、児童書から今に至るまでの愛読書というものは、その後の研究の興味とか、あるいは、人生で大事に思うものなどにも、綿密に繋がっているということです。

児童書で１冊挙げます。こちらの『夜中出あるくものたち』はもちろん翻訳で読んだのですが、これはイギリスの児童書です。ジョン・メイスフィールドという英国の詩人が書いた童話なんです。これは今思うと、すごく自分の好みとか、研究に合っているなと思います。例えば、端正な文章。もともととても綺麗な文章ですが、それをさらに石井桃子さん、有名な翻訳家ですね。この方が選び抜いた日本語に変換されている。この辺から文章の好みが確立していたのかな、などと思います。

こちらのお話はファンタジーなのですが、現実と不思議な世界の境界が非常に曖昧に描かれています。これはケイ・ハーカーという少年、ケイ君のお話なのですが、お屋敷に住んでいる孤児の少年で、お屋敷の昼間の日常風景と、夜の魔女とか死者なんかの闊歩するような世界、その両者が非常に曖昧に繋がっているんですね。この辺は、怪しい世界がすぐ隣にある日本の怪談に近しいものがありますし、能・謡曲の世界ですね、幽霊が身近な存在だったり、そういうところと通じているなと、好みに合っていたのだなと思います。

あとは、伝説や古典文学の引用ですね。私が普段手を染めているのが近世文学、つまり江戸時代の文学なのですが、非常に引用の多いジャンルです。中国古典やら昔の日本の文学作品やらがたっぷりと取り込まれているのですが、こちらの『夜中出あるくものたち』にも、アーサー王伝説などが随所に引用されています。子どもの文学と思いきや、意外と綿密に、古い伝承に裏打ちされた作

品だったのだなというのが、大きくなってから分かってきました。当時は普通にさらっと読んでいましたが、この本で自然と覚えたアーサー王伝説の逸話も少なくないです。

あるいは、こちらの本のテーマには、失われたもの、忘れ去られたものを探求していくということがあるのですが、これは今まさに研究に通じています。あとは、おいしいものも出てくるので、これも趣味に合っていましたね。

失われたものの探求といいますと、これは20代以降で読みましたが、右下に挙げた『シャドウ・ダイバー』なども、私の今の嗜好と合っています。これは深海に潜って、宝物が積まれたままの難破船を引き上げ、お宝探しをする男たちの話なのですが、著者はある日、Uボートが沈んでいるのを見つけます。Uボートとは、第２次大戦時にドイツ軍が使っていた攻撃用の潜水艦ですね。実はアメリカは、このUボートが沈んでいる場所をあちこち把握しているらしいのですが、これは記録にない謎のUボートだった。一体誰が亡くなって沈んでいるのか分からない。そこに眠るのは誰なのか。これを解き明かしていく話なのですが、こういう失われた誰かの存在、記憶に迫っていくところも今の研究と一脈通じているので、グッとくるものっていうのは関係あるんだなとか、愛読してきた本、揺さぶられる本で自分のことが結構分かるなというのは、今強く思うところです。

さて高校です。高校は、戦国時代の山城跡の、小田原高校という所に通っていました。資料には、演劇部に義理で入ったと書きましたが…実はこちら、食べ物につられて入ったと言われております。厳密に言うと違いまして、新入生歓迎の時期に、「今度私たち、この間の講演会の打ち上げで食事会やるんだけど、よかったら来ない？」 と優しい先輩方に声を掛けられて、ご飯を頂いてしまったので、悪いかなと、義理立てして入った次第です。でも、そこがすごくいい所で、横のつながりはもちろん、１年生から３年生、OG・OBまで隔てのない上下の付き合いもあった所でしたので、そこで３年間、仲良く楽しく過ごしました。いろんな年代の人とふらふら付き合っているのは、この頃もすでにだな、と思います。放課後・休日には、昔の名残があちこちに顔を出す城下町を、ぶらぶらと歩いて過ごしておりました。

ちょうどその高校の頃、朝日新聞で伴野朗氏の『霧の密約』が連載されていました。連載小説を読みながら思ったのは、例えば『少年ジャンプ』などで連載中の漫画を読む場合も同様に思いますが、物語が段々と進んでいくのと、自分も段々、当然ですが日常が進んでいくのが、時間の流れの速度は異なるものの、何となくリンクしている感じがして、親しみを持って読めるんですね。あと、これは、ちょっとサスペンスっぽい話なのですが、孤独に目的を遂行する人が大勢登場する群像劇です。それを見ていると、現在の自分の孤独に遂行している（もっとヘラヘラしてますけどね）研究人生と、ちょっと繋がるところがあったのかななんて、今いろいろ昔のものを、本棚に見ながら、思うことがあります。

では、スライドの４に参ります。お茶大に入学しました。１年生、初々しい生活が東京で始まります。このときもずっと小田原から通っていました。子どもの頃から思っていたのは、将来は好きな本をたくさん読める学問の道に進みたいなということでした。ちょうどこの頃、私が一番行きたかった大学は、実は、國學院大学でした。そこを含めてたしか７校受けたのですが、受験期間が始まってしばらくして、すごくがっかりすることがありました。國學院に受かった、やったー！　という日に、運悪くと言ったら非常に悪いのですが、東女にも、たまたま同じく、受かったよという通知が来てしまった。そうしたら親が勝手に、「國學院より東女のほうがいいんじゃない？」 って、そっちに入学金を入れちゃったんです。私の行きたい所に行けなくなってしまった。ものすごくげんなりして、あんなキラキラしたお嬢さんがいっ

ぱいいるところに行きたくない！　あんな入ってすぐに運動会があるところに行きたくない！　あそこでいいのは、猫がいることだけだ！　なんて思って（失礼）、腐っていたところを、たまたま記念受験ぐらいで受けていた地味なお茶大に受かっていて、良かったと、こっちに来たのです。

そもそもお茶大を受けたのは、私の伯母の一人が女高師の出身だったからです。彼女は死ぬまで、数式を解くのが大好物な、根っからの数学愛好家でした。それで、お茶大も受けるかと、ここは後期入試で記念受験をしていたところ、何かの間違いで受かったわけです。小論文では、言語に関することで気になることを書けとか、すごく緩やかなタイトルが出ましたので、これは高校生として親しんでいた辞書の出版社の悪口を書き連ねました。英和辞書と和英辞書で、非常に差がある出版社で、英和はすごく出来が良いのですよ。語彙と用例が素晴らしく豊かに載っている。なのに和英が使い勝手が悪い。これはちょっといただけない、なんてことを延々論じたら、性格の悪いどちらかの先生の目に留まったものか、拾っていただけました。

そして、入ったお茶大ですが、皆さんご存じのとおり、様々な、それはそれは尊敬できる、素敵な、一部妙ちきりんな研究者の先生方がいらっしゃいます。その中でも基礎ゼミの担当だったF先生、この方は別格でした。先生を生でご覧になった方は分かると思うのですが、先生、実は写真の印象と違って、背がものすごく高いのですね。茗荷谷あたりを夕方歩いていらっしゃると、怪人が歩いているなって佇まいです。全身から教授オーラを放っていらっしゃるこの先生、言わずと知れた数学者ですが、日本文学にも精通されていらっしゃいました。

当時、１年生が受ける基礎ゼミは面白い授業で、必ず自分のコースと違う先生の授業に出なさいと言われました。日文の先生以外の先生について学びなさいということですね、私だと。その先生たちの、いわゆる好き勝手な授業を受けることができました。当時F先生の基礎ゼミは、近代の海外の人が書き留めた日本についての書物を週１冊読んできなさい、さらに、その感想を書いて提出した上に、仲間と意見を交わしなさいという内容でした。本が好きな人にうってつけの内容だったのですが、F先生、こういう近現代史の類が大好物でいらしたのですね。このゼミを受けることで、お雇い外国人の人の書いた本であったり、あるいは、プラントハンターですね、あちこちの国に行って、珍しい植物を持って帰る、一部スパイだったらしいですけど、そういう人たちの書いた本であったりを、いっぱい読むことになりました。

すると、読書範囲と歩き回る範囲がさらに広がっていきました。例えば岩波文庫は色分けされていますが、岩波文庫の青のところに、そういうお雇い外国人の人の本があるな、片っ端から読んでやろうなんて読んでみたり、あるいは、そういった書物に出てくる近現代の事件が起きた場所、ここ、お茶大からそんなに遠くないな、都バスで行けそうだ、休み時間にちょっと見に行ってみるか、そんなふうに世界がまた広がりました。基礎ゼミではF先生ご自身も、毎回しっかり読み直していらして、授業に臨まれていたのですが、時には、「今回は時間がないから、僕が書いた本をネタにします」なんてことをおっしゃって、ご自身の若い頃の著作を取り上げられたこともありました。『若き数学者のアメリカ』、こういう、ちょっと前の時代の、海外での体験がつづられた作品も、面白く読みました。読んでいない方がいらしたら、先生のへんてこな体験、覗いてみるといいかなとオススメです。

では、次にスライドの５に参ります。日文の研究方法の入り口に入りました。２年生です。この学年では基礎演習を行いました。研究方法の初歩を学ぶのが２年生なのですが、当時の日文は恵まれていまして、上代…これは『古事記』とか『万葉集』、古代の時代ですね。あと、中古…平安時代。

中世…こちらは鎌倉から戦国時代ぐらいですね。あとは近世…江戸時代と、近代と現代文学に、さらに日本語と、先生方がそれぞれ別にいらっしゃいまして、各年代、各ジャンルの授業を余さず受けることができました。そういう非常に恵まれた、いい時代でした。このとき、一体何を取ろうかなと思ったのですが、物語もいいけれど、和歌の研究というのは何をやるのだろうと、気になりました。もともと和洋の歌や詩の類いも好きだったので、ちょっと予想が付かない方面に進んでみようかと、中古（平安時代）を選択しました。

こちらにいらしたのがご担当のH先生です。優雅な美しい先生なのですが、研究では鬼のような方でした。研究について最初にご指導いただいた、私にとっては大恩人、大恩師です。このときは、藤原道長の私家集が材料でした。道長といえば、自分の人生を満月に例えた、最期は阿弥陀仏９体と五色の糸で我が身を結びながらも、下痢に苦しんで、ひどい最期を遂げたんでしたっけ。誰かの日記に書かれると、人の最期って残っちゃって嫌ですね…その方の私家集（１人の人を軸とした個人の歌集）の『御堂関白集』、こちらを皮切りに、歌詞と書いて「うたことば」、歌に使われる言葉とか、和歌の贈答から見えてくる誰かとの関係性、あるいは、その当時の文化などの奥深さを学び、これにすっかりハマってしまいました。

ここで、よし、私は中古文学に進もうと思うと、こうなるとまたちょっとフォーカスが変わってくるんですね。興味は一気に平安時代に向かいまして、あと、京都方面の地理はどうなっていたっけとか、名残はないかなとか、旅行に行くのもそちらの方面が増えてきたりと、変化が生じてきました。ところでこのH先生はエレガントで、目立つ長身でいらっしゃいます。そのH先生を評して、某哲学のT先生は、優雅な仁王像なんておっしゃっていたんですが、これはH先生ご本人の知るところとなり、後で大目玉を食らったとウワサがありましたね。ちなみに女高師出の伯母も大変にエレガントで長身だったので、お茶大の、一種の、定型として、すごく背の高い優雅な人っていうのがいるのかな、なんて思っていたのも、この２年生の頃でした。

では、次にスライドの６に参ります。さまざまな研究方法を学んだのが、３年次の演習でした。当時、日文では（今はどうなんですかね）、３つまで演習に参加することができました。本当にこの頃は体力があったなと、我ながら思います。ここで私が選んだのが、上代、中古、近世の３点でした。

まず、上代なんですが、こちらはやはりお茶大OGでいらっしゃるO先生のご担当。O先生は、さっき長身な方が多いと言いましたが、小柄でいらっしゃるのですが、普段は慈母のようにとてもお優しい、ただし、演習では激変して鬼教師となるという、それはそれは素敵な素晴らしい先生でした。私はO先生の授業で、同級生の本気の涙を３人以上見ました。自分の発表は後のほうだったので、自分は泣かないように頑張ろうと、ガクガク震えながら演習準備をした覚えがあります。先生の所では難解な『古事記』の中巻を研究させていただきました。

演習の題材には『古事記』を選びます、好きな箇所を選んでいいですよというお話になったのですが、私が取り上げたい中巻の話には、３年生が選ぶには問題がありました。中巻って、ちょっと変わった話が出てくるんですね。『古事記』は神様のお話が多いので、小さい頃からファンタジーみたいに読んでいたのですが、中巻のもう少し人間の時代になってきた時代のその話、これは大学生が初めて研究し、４年次の卒論に繋げていくには難しい所だから選ばせない、でも、もし４年生で上代ゼミに来ないのだったら、好きに選んでよいというお話でした。私が選んだのが、ミカンの絵を載せてありますが、多遅摩毛理（タジマモリ）という人が出てくる話です。これは天皇に不老不死の木の実を探して参れと言われた多遅摩毛理が、

手に入れて献上のため宮中に伺ってみると、もう天皇は亡くなってしまっていた…そういうちょっと切ないお話です。こちらでもみっちり鍛えていただいて、研究者って、こういう厳しい姿勢で対象に向き合うのかなどと、いろいろ学ぶところがありました。

中古は、物語も少し見てみたのですが、和歌の研究がやっぱり面白いなと、ますます引き付けられました。ところが、ダークホースが現れました。近世！　物心ついた頃から時代劇が大好きだったので、この時代は、私の趣味ではあるけれど研究はしないな、でも、ちょっと覗くのは面白そう、そう思って演習に参加したのですが、これにまあ、うっかりハマってしまったのですね。右下に書きましたが、いろいろ楽しい作品があります。江戸時代の文学は先行作品をいろいろ踏まえているよという話をさっきちょっとしましたが、例えば井原西鶴、この人の本にはとにかく仕掛けと遊びがこれでもかと入っている。あるいは、上田秋成、この人は中国の文章なんかも引きながら、なかなか端正な文を書く（本人はちょっと変人だったようですが）。それぞれスタイルがありまして、そういうものを知って、面白さにのめりこんでしまいました。

そして、ちょっとこんな身の程知らずなことを、思っちゃったんですね。「近世文学にはそれ以前の時代の文学が流れ込んでいる。近世を選んだら、あらゆる文学に触れることができるのでは…。今まで学んだいろんなメソッド、使い放題なんじゃない？」 なんて思ってしまいました。いや、甘かったですね。安直なんですけど、でも、文学研究はそれだけ面白かったので、当時としては真面目な考えでした。

そして、スライドの７に参ります。錯乱して近世ゼミに進みます。近世の先生は気さくで学生思い、研究は綿密な実証主義のI先生でいらっしゃいました。本人はハッハッハと笑っているとおっしゃるのですが、ヘッヘッヘと聞こえるので有名な（？）、ユーモアのある楽しい先生でした。お茶大は、少人数でアットホームなんですね、良くも悪くも。先生方は学生の動きを熟知していて、学生が先生の噂話をするレベルで、先生方も学生の噂話をしているそうです。私については、あいつ当然中古ゼミに進むだろうという話になっていたそうで、I先生の所にご挨拶に伺って、来年先生のゼミに進みたいのですがと申し上げたところ、非常に驚かれました。あれ？　あんまり驚かれたから歓迎されていないかなと思って、次に、ご報告と今までの御礼のためH先生のお部屋に行きまして、実は近世を選ぶことにしました、と申し上げようとしたら…先輩方が大勢、運悪く、いらしたんですね。「あら、森さん、いらしたの？　皆さんちょっと集まって、来年私のとこにいらっしゃる森さんよ」とH先生に言われてしまいまして、すごく言いづらかったのですが、「実は近世に…」と申し上げまして、その日の帰り、私は人生の選択を失敗したのかななんて思って、このまま通り魔に刺されればいいのにとか、暗澹たる気持ちになって、東京駅を歩いていた記憶があります。生きてて良かったです。

そうやって、近世に進みました。近世のいいところは、文献の実物がたくさん残っていることです。近くに神保町がありますね（お茶大の元あった場所だったら、もっと近いんですけどね）。古典籍を手に取る機会がぐっと増えまして、I先生のご引率の下、神保町ツアーなんて楽しいイベントも度々あり、本の街が庭になってきました。今の行動範囲も、軸にしているところはどこかなと考えると、神保町周辺かなと思います。

この頃の楽しみといったら古本。古本文化どっぷりでした。それと、美術館、博物館。この点、お茶大は立地がいいですよね。上野も行きやすいし、東京駅周辺なんかの美術館への動線も良い。何かイベントがあると、ふらふらっと帰りに寄れるので、恵まれていました。この時代に、古本とか、展覧会の図録など、人を殴り殺せるサイズと

重量の書籍をいっぱい集めました。今も集まっているんですが、そうすると、何に使うの？　とか、一回真面目に読むとしても、人生で二度、これから読む？　なんて、いろいろ言われたのですが、ひたすら積みました。実家はそろそろ図録の重みで沈んできているかもしれません。また、散歩や旅行、食べ歩きも大いなる楽しみでした。私、本当にめちゃくちゃ食べて、めちゃくちゃ歩くので、旅行に行くと、同行者が実によく倒れます。２～３日目ぐらいで大体ダウンする人が出ます。そうやって遊んでいました。お茶大では附属図書館が大好きで、しょっちゅうふらふらしておりました。今も行っています。

さて、卒論を書き上げることになるのですが、最後の３日間は貫徹して、体がおかしくなりました。怪異小説集の『宿直草（とのいぐさ）』という作品を取り上げました。これは関西のほうの俳諧師の師弟の著作といわれていますが、専門的に俳諧を嗜む方々の作品だけあって、言葉遣いにインテリジェンスが漂っている、あと、何かいろいろ隠された仕掛けがありそうだな、という雰囲気のものです。

この作品にはその時代までの合戦であるとか、武士などの人名などもちらちらと出ていたのですが、卒論を書き上げた後にI先生がおっしゃったのが、「君、武士の調査、向いてるんじゃないか」ということでした。なぜ怪談で武士なのかということなのですが、実は戦国時代というものは怪談ととても相性がいい。親和力があります。当然ながら人が大勢死にますので、幽霊が大発生する土壌があります。それに、恨みつらみとか悲しみ、負けた側の負の感情みたいなものも渦巻く時代でもある、そして、戦乱に直接関わっていない人々の間でも、何となく社会不安が漂っているという時代です。そうすると、そういう時代を舞台として、怪談というジャンルは成立しやすい。この作品にもちらちらそういう要素が見て取れたのですが、それで調べた武士や合戦などの情報を見て、先生は評価して下さったのですね。

なおかつ、私が小田原出身なので、「戦国時代にがっちり絡んだ地元ネタの本が、何かあるだろう」と。いくさの書と書いて、軍書というジャンルが江戸時代にはあります。これは合戦記だったり、武士の逸話であったり、とにかく「いくさ」にまつわるありとあらゆる書物を内包するジャンルなのですが、「軍書はほぼ手つかずだから、やってみたらどうだ、面白いぞ、誰もやってないぞ」なんてことをおっしゃって下さったのですが…この穏やかな私が血なまぐさい話はちょっとな、先生、何てことをおっしゃるんだろう！　と思っていたんですが…スライドの８に参ります。

マスターに進学しまして、誰もやっていないなら面白いかもしれない、軍書やってみるか！　ということで、手を染めることにいたしました。よくよく考えたら、もともと時代劇が好きなのだったし、大河ドラマで好んで見ていたのも、血なまぐさい時代のものばっかりだったなと、後から思いましたね。意外と軍書と、相性が良かったです。

実はそれまで趣味で鑑賞していたものが、まさかの役に立ったのが、このタイミングでしたね。美術館なんかで見ていた、茶道具とか、小袖、これは袖口の開きの小さい着物で江戸時代でもメジャーなものなのですが、そのような戦国時代の文化に関わる文物、あと、古地図、これは合戦の跡地を見たり、その後の町の動きを探る時などにもすごく役に立ちました。

あと、意外なところで、家紋です。私は古い文様とか家紋の類が好きで、旅行先では墓地に入って、ちょっと変わったご当地の家紋を見つけて悦に入りながらうろうろしています。趣味悪いですね。実は江戸時代、政権が安定してくると、戦国時代の噂話なんか書くと、怒られちゃうようになります。というのは、今やトップの徳川家をはじめ、名家になっている家の戦国時代の卑怯な裏切りであるとか、惨殺事件であるとか、そんな不名誉なことを書かれると、彼らとしては腹立たしい

わけです。すると、お上からスルスルと手が回ってきて、「この本は情報の出処も不明で怪しいから、出版は差し止め」となってしまいます。ひどいと処罰ですね。すると、書く側はどう対処するかというと、登場人物の名前を変えて、元の武士の「におわせ」で書くわけです。そして、挿絵の人物には紋が付いている。「これ、本文では名前を伏せたり、変えたりしているけれど、この鶴の丸の家紋はあそこの家だよね」なんて、すぐ分かるようになっているんですね。その知識がないと分からないのですが、ちょっと家紋に慣れてくると、読み解きが非常に楽、むしろバレバレで書いているなというのに気付きます。この表現方法であれば、お上もある程度は目をつぶってくれていたようです。そんな読解の際に役に立つと気付きました。

こんなふうに、ぼんやりそれまで親しんでいたものが、だんだん研究を通して繋がっていきます。ここで研究が役に立ってきたなという感じですね。逆かな。研究に役に立ってきたのでしょうか。

その２年間の修士の最後に論文で取り上げたのが、『鎌倉管領九代記』という、寛文12年（1672）に刊行された作品でした。こちらは９巻15冊の大部で、一冊一冊は薄い本ですが、積み上げるとかなりの厚さになります。これは鎌倉公方と、後に弱体化して古河に移動して古河公方になってからの、合わせて９代の時代の関東の戦乱の動向を、公方ごとにまとめた作品です。それまであまり研究されていなかった書物でしたが、「そういう作品は誰も研究してこなかっただけの理由があるよ」と先輩に言われました。どういうことかなと、着手してから分かったのですが、とにかく書誌のバージョンがウジャウジャあるんですね。まずそれの整理だけで一苦労だったのですが、なかなか力尽きる作業でございました。

これを通して、地元の小田原とか、東京の近郊、そんな日常のぶらぶら歩きの場所が、一気に戦国期の舞台として目に映るようになりました。さらに、作品のいろんなバージョンを整理していくと、求板（版権の移動）についても理解が深まりました。江戸時代は木の板を彫って作った版木で刷って、本を作るのが一般的です。その版木がそのまま版権になるので、版権を移すときは、版木の実物が本屋間で譲渡されます。その移動に伴って、バージョンが変わったり、あるいは、ページ数を紙の節約で減らしたり、そういうことが行われていたことが、調べる内に段々と見えてきて、書誌学の問題も目に映るようになってきました。

ちなみにこの修論の執筆の時、私には相棒がいました。中文のＮちゃんという友達に、「毎晩お互い添付ファイルで送り合って、添削し合おうよ」と持ち掛けられたのです。これがとても良かったです。仲が良かったのですが、分野に距離感があったのも良かったのですね。もし同じ日文とか、同じゼミの間柄だったら、私のほうがたくさん書いたとか、私のほうが進みが早いとか、張り合い、嫉妬の類が生まれたかなと思うのですが、全然違う分野だったのもあってお互いに、「ちょっとこれ、門外漢からすると意味が分かりにくいよ」なんて教え合いもできたり、変な対抗心がないまま、ちゃんとお互いに進めることができました。良い思い出です。今や彼女は某大学の教授で、たぶんビシバシ、優しいですけど、教えていらっしゃる筈です。

では、次にスライドの９に参ります。ドクターに進学いたしました。ここで、愛する地元を取り上げようという熱意に駆られます。というのは、私の住んでいる小田原は、大河ドラマでは、とかく敵役で、やられ役です。そんな、うちのお殿様の後北条氏、みんなそのファンなんです、地元の人は。殿と言いつつ、実は我が家の先祖は違う殿に仕えていたのですが、小田原に住んでいる人は、なんとなくみんなこの後北条氏（小田原北条氏）の味方が多いです。しかもそのお城跡の高校に通っていた者として、江戸時代の書物への、多くはあんまりな描かれ方、これを検証しようじゃな

いか、そういう気持ちになりました。地元ラブとしては、普段からふらふら散歩する場所だった墓所や遺構などを、あらためて訪ね直すことから始めました。

そうやって博論の研究を開始しました。研究を伴って見ていくと、見える所は変わってきます。スルーしていた説明の看板のちっちゃな記事なんかに、実は非常に重要な情報がある、そういうことに気付くんですね。

震災の年、2011年には、電力が落ちて、パソコンが止まって、大変でした。長時間かけて作った表が、一瞬で白紙になったり…。この年に書き上げた学位論文が、「近世前期軍書の研究―後北条氏関連の話題の形成と波及をめぐって―」です。大雑把に分類しますと、三つのテーマから成る論文です。兵学者（学問として、武士の心得とか、戦法などを教える人たち）の活動による、特定の武士や一族のイメージ形成が、実は行われていたということが一つです。また、兵学者との関わりも深いのですが、武辺咄集と称される、短篇の武士の逸話集のジャンルがあります。実はその影響力がとんでもなく強いということが一つです。そして、戦国時代の文化面への、江戸時代の読者の興味も強かったということが一つです。これは今と変わらないですね。武将は日常生活で何して遊んでいたのかなとか、この人は茶の湯にハマっていたのだなとか、この人の詠んだ和歌ってどんなテイストかななんてことを、江戸時代の人も同じように、ちょっとミーハーに見ているのですね。そういう興味が江戸時代の本に記されている。そういうことにも気付くことができました。

この研究を通して、時代劇の元ネタはここだったのか、実はこの逸話、うさんくさいんじゃないの？　とか、茶の湯とか和歌なんかの話題はこんなにたくさん書かれていて、趣味人としてあんな人も知られていたのだなとか、またここで、今までの興味が一気に収束していく体験をすることができました。そして、物理的にもどんどん移動していきます。研究に引っ張られて、運命の金沢にたどり着きます。学位取得後も研究は続いていくのですが、この時期が一番ハードです。大方の人は非常勤講師をしながら研究を続けるのですが、お金がない、体力だけはまだちょっとあるかなという時期です。

さて、博論では武辺咄集の『武者物語』という作品も取り上げたのですが、実はこの作者の松田秀任という人は、何とも正体不詳の人でした。武士だろうということは言われていて、『国書人名辞典』（江戸時代までの本の著者を網羅した辞典）にも一応説明はあるものの、どうも怪しい。何だかこの『武者物語』を見ていくと、金沢絡みのネタがちらちらあるのと、あと、この本には、『武者物語之抄』という増補版があるのですが、そこで訂正が加えられている話題を見ると、やはり金沢ネタが多い。この人は金沢―加賀藩の出身者なのかなと、一応状況証拠を抱えながら向かってみました。

このときは国文研（国文学研究資料館）の予算を少々得ていましたので、それで向かったのですが、行って調べてみたら、秀任＝加賀藩関係者の証拠は全然出てこないのです。もしかしたら私…これ、お金の無駄遣い、単に新幹線が通ったばかりの金沢に遊びに行く人になっちゃったんじゃ…と思って、頭を抱えていましたら、そこでたまたまご当地の兵学者の自筆の本を見る機会がありました。そこに何と、松田秀任は私の若い頃の師匠だよということが書かれているのを見つけまして、その後、一気にこの人の正体が分かってきました。これは著者に声を掛けてもらったように、恩のように感じているのですが。

その著者は関屋政春という人です。この人をはじめとする武士、特に兵学者たちの著作と活動が、私の現在の中心テーマです。科研費は、これもなかなか取得が大変なシロモノですが、この研究で初めて取得できました。この時はすごくノリノリで、応募書を書いていたと思います。この関屋さ

ん、なかなか面白い人で、この人もすごくフットワークが軽いし、おしゃべりが好きだし、いわゆるコミュ力が尋常じゃない方だったようです。何か気が合ったのかもしれません。ありがたく、今では自分のおじいちゃんのように勝手に思っております。武士とか兵学者などというと、近世文学の研究ではなかなかマイナーなところです。今でも、それ文学？　と、時折陰口を言われるのですが、自分では面白いところへ、犬棒かるた式にたどり着けたかなと思っております。

次にスライドの11に参ります。興味から別の研究へ、研究から新たな研究へと書きましたが、なじみの場所を研究目線で歩き直すこと、これはひしひしと感じることですが、研究する身となって歩き回ることで、地元の小田原もそうなのですが、ニューロンとニューロンがウニョーっと仲良く手をつなぎ合うように、漠然と蓄えていた知識と知識同士が思いも寄らぬ形で繋がっていったり、あるいは、それで文学作品の新たな解釈を得たりと、そういう体験もしました。

例えば、井原西鶴の作品に『西鶴諸国ばなし』というものがあります。これは諸国（日本中のあらゆる場所）の奇談集という体裁の本なのですが、その中の一編に「大晦日は合わぬ算用」という作品があります。これは一応「義理」の話と目次に示されているのですが、ちょっと妙な話です。

ざっくり説明しますと、貧しくて、江戸の真ん中に住んでいられなくなった原田内助という男が、品川のあたりに、妻と引っ越します。そこでもお金を使い果たしてしまい、このままだと大みそかも新年も過ごせないという時に、あいつしょうがないなと思っている、内助の妻のお兄さん、つまり義兄が神田明神あたりに住んでいるのですが、この人がお金を送ってくれます。お金を送ってもらった内助は、節制すればいいのに、昔の貧乏浪人仲間を呼んで、ささやかな宴会を催します。義理の兄が実はこんなにお金を送ってくれましたと披露して、楽しく飲んでいたのはいいのですが、そのうち小判が１両分、消えてしまいます。仲間の誰かが盗んだんじゃないかという雰囲気になるのですが、そこはそれ、みんな浪人の身ではあっても、心が綺麗な者たちなので、一人一人自分の潔白を証明すればよいと順々に衣服をあらためていくと、３人目の男がすごく難しい顔をして、私は運悪く今日１両持ち合わせている、これは盗んだものではないが、皆はそう思ってくれないだろう、潔白を示すために腹を切る、なんて物騒なことを言い出します。

それで騒ぎになって宥めていると、ここにあったぞと、誰かが１両を放り出す。良かった、あったと言い合っていたら、しばらくして妻が、台所に紛れていましたよと持ってくる。あれ？　１両増えている？　となるんですね。さっき友達が腹を切りそうになった時、誰かが自分の持っていた１両を投げ入れてくれたのではないか、いったい誰が？　という話になると、誰も名乗り出ません。武士は自分の善行をひけらかさないのですね。ここでは、命を捨てようとしていた友達のためにも。誰も名乗り出ないけれど、内助がこの後、うまい手段を講じて、ちゃんと持ち主に正当に小判を返します。いや、武士っていうのは非常に気持ちの良い付き合いをしているよねというお話で、実はよく道徳のテキストに使われてきた一編です。

テキストに使われているんですけれど、よくよく読んでみると、冒頭のほうでは商人に対して内助が非常に感じの悪い対応をしています。これ、武士同士は仲良くしていても、他の人に感じの悪い、そんな武士階級に対する西鶴先生の嫌みだよねというの、一目瞭然の話なんです。道徳に使うのも、ちゃんちゃらおかしい。これをちょっと突っ込んでやれと思ったのと、あと、この話はよく見ると、平将門公、怨霊でも有名な神田明神のご祭神ですね、そのネタがいっぱい遊びで組み込まれています。例えば友達が７人出てくるのですが、これがいわゆる七人影武者の話であったり、神田明神が出てきたりと、あちこちに見当たるの

に、なぜか今まで指摘されていない。

ちょっとそこだけ取り出して論文化しようかなと思っていたのですが、この時も、よく歩くところだし、ちょっとお参りがてら歩き直すかとうろついていましたら、ここの博物館で、ふと年表が目に留まりました。そういえば、この『西鶴諸国ばなし』が出版されるちょっと前の時代、江戸で天和の大火災という大火事がありました。この記憶が実は絡んでいるんじゃないかとか、あるいは、それに関連して、どうもモデルとして暗示されている２人の人物がいるような気がする…そんな風に着想を得て、書き上げることができました。

これを書いた時に、その抜刷（論文集の中から一篇の論文のみを印刷、綴じたもの）を配ったところ、この先生なら多少は評価して下さるかなと思った先生には無視されて、一方で、この先生には激怒されるかなと思った先生には、「君、これくらい大胆に書くといいぞ」と激賞していただいたり、いろいろ思い出深い論文です。何より良かったのが、私の恩師のI先生は、実は残念ながら、数年前にお亡くなりになってしまったのですが、この論文をI先生にお目にかけた時、「これ面白いぞ」と評価していただけたことです。この時は本当に一番、自分の今までの論文を書く人生の中で好き勝手に書き上げましたので、ここで一つエポックメーキングになったという感慨があります。そして、本当に現場歩きで得るものは多いなと実感しました。

近著の『家康徹底解読』、これは分担式で大勢で書いた本なのですが、この時は『江戸名所図会』を取り上げる章を割り当てられました。『江戸名所図会』というのは、江戸の名所図会（ガイドブック的な本）の内、一番最後にできた大部のもので、江戸草創期の昔からの名主一族のおじいちゃん、お父さん、息子の３代で書き上げた、集大成的な素晴らしいガイドブックです。「その中の家康ネタを、拾って書いてくれない？」という、非常に気軽で恐ろしいオーダーをいただいたのですが、その時の調査も、うろうろ歩いて考えて、やっぱり得るところが多かったです。古くからの町が残っていると、そこに染み付いている文学の残り香を拾い上げることができるので、足で歩くのは重要なことだなと常々思っています。

では、スライドの12に参ります。研究を介して新たな世界と繋がる。これも意外な所とご縁ができるのが非常に楽しかったです。大学院時代もフランスのコンソーシアムに参加したり、これは参加してみると、武士の話はみんな聞いていて分からないから（当然ですよね…ネタの選定ミスでした）、無表情になられちゃって悲しい思いをしたのですが、例えば向こうでも有名な浮世絵師の菱川師宣のデザインブックの話なんかをすると、食い付きがすごく良くて、皆さんの興味は、ここか！ とか、探るのも面白かったですね。あとは、武将の地元から、あなたは論文を書いているようだけど、ちょっとうちの殿様の逸話について語らないか？　なんてトークに招聘していただいたりとか、研究していたおかげでいろいろ知らない世界と出会えたという実感は持っていました。

最近もこういう面白いことはなんだかんだ続いています。例えば着物ファンのイベントで小袖の図案の解説をしてくれというので呼ばれて行ったり。ここは学会とか研究会なんかとは違って、普通の着物ファンの方がいっぱいいらしたので、話していてもお構いなしで、この柄、私、好きなのよ、最近あつらえて持っているの！　なんて話が飛んできたりと、すごいカットインがいっぱいあったので、いろいろ会話力も鍛えられました。

あるいは、これもすごかったですよ。ある日、仕事先にメールが来まして、電話してみたら、「実はあなたの昔の論文にインスパイアされてアート作品を作りました」って…意味が分からないでしょう？　実は某大学の先生とアーティストの集団の人たちだったのですが、それで、あなたが論文に引いている文献について教えてくれないかということでした。それでオンラインで話していた

ら、私が内気じゃなさそうだなと思われたらしく、よかったらイベントに参加してくれませんかと言われまして、結局、気が付いたら、巨大アート作品の中に寝転んで、語って、しかも、それを撮影されているという、意味不明の楽しい経歴ができてしまいました。

あとは、これは一見、一番地味に見えますが、鎌倉で鴨長明の著作のセミナー。実はこれがなかなかの体験で、人生の先輩方を相手に、鍛えていただいております。戦前、大学を出た段階で「学士様」と言われていた時代、お分かりになりますか？　その時代に、昔の言葉で言うと、「女だてらに」学士になられたような受講生の方々もいらっしゃる所で、みなさん古文なんかすらすらお読みになります。そんなコワい場所で話をするという貴重な講義で、この間も講義後にお話ししていた方が、とある文豪の学問上の直弟子だったことがぽろっと話題になったりして…そのようなすごい経歴の方がいっぱいいらして、ここでもいろいろと面白い体験が続いています。

こんな感じで、他にもあるのですけれど、いろんな、形容しがたい所も含めて、あちこちと繋がり、ユニークなご縁ができる、これも研究のおかげだなと、一方では感謝し、一方ではしみじみ、いつの間にやら自分は面白い所にいるなと思っています。

では、次にスライドの13に参ります。節操のなき研究と趣味を繋げる行為。これは実は教育にも非常に役に立ちました。時代はアクティブラーニングが必須になっています。授業中に、例えばグループワークで話をさせましょうとか、学生同士交流させましょうとか、人前で発表する機会を設けましょうとか、今はいろいろオーダーが頻繁です。時流だと思います。しかも、そんな中、コロナ禍でオンライン授業が増加しました。画面を介して交流しなければいけないけれど、中には飽きてしまって、真面目に参加しているふりをして違うことをする人も出てくる。すると、飽きない、盛り上がる楽しいネタで、何か学問に通ずるものを、考案しなくてはいけなくなりました。

このとき役に立ったのが、昔からの美術館通いと食べ歩きでした。ここで古典文学とゆかりの深い趣味とは何だろう、ちょっと楽しいものをと考えまして、小袖のデザインを、まずしてもらおうと思いました。例えば江戸時代に、こういうものがあります。ご覧になれますか。これは昔の小袖の図案集です。これを見ますと、これは律義なバージョンですね。橋が８つに、カキツバタと流水が描かれています。綺麗な水辺の風景だよねと思いますが、これは見る人が見れば、すぐに分かりますよね。『伊勢物語』東下りの章段に出てくる、「唐衣着つつなれにしつましあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ」の暗示です。主人公の男が都に居づらくなり、当時はド田舎の東国に下ってきた。その旅路の途中で休憩していると、水辺に美しくカキツバタが咲いている。この花の名の五文字を句の頭に据えて歌を詠みなさいと仲間が言ったので、それに応えて、遠くに残してきた愛する人への思いを詠んだ。その和歌に一同は感動して涙を流し、持っていた干飯がふやけてしまったと、そういうお話がありますね。それに着想を得たデザインです。当時の着物は、みんなオーダーメードで作りますので、こういうデザインブックもあります。文学由来の図案、謎かけみたいなものもいっぱいあるんですね。こういうものを参考にして、文学から着想を得た着物というのをデザインしてもらおうと考えました。

和菓子のデザインと名付け、銘の問題も、よく授業で取り上げています。和菓子はとても小さな芸術です。表現もわずか。だけど、姿と名前が響き合うことによって、数々の深いイメージが頭に浮かび上がります。ここに載せたのは現在売られている某老舗の和菓子ですが、名前に「月」とあることで、丸い形がそのように見えてきます。こういう名前とデザインの問題で、和菓子を考案・プレゼンしてもらう授業も実施しています。

他に、慣れてきたところで、ビジュアルのデザインが主の課題の他に、文章のデザインにも取り組んでもらっています。評判記スタイルの人物紹介です。江戸時代には、遊女の評判記、役者の評判記などというものがあります。そのスタイルで人物紹介をしてもらったり、または名所図会風に好きな土地紹介をしてもらったり、あるいは、緩いルールで俳諧ごっこですね。五七五と七七を、順に繋げ、イメージを展開させながら、また切り替えていく、なかなか高度な遊びです。これをその場の全員で行ってもらったり、そんなふうに現在は遊んでもらっています。

今週、私に運悪くつかまって、許可を得られてしまった、昨年度の方々の作品をご覧下さい。こちら、まず、Wさんの作品。こういう課題では、大体シチュエーション物で出しています。このシチュエーションでは、某有名観光地のレンタル着物ショップの店員さんとなって、日本文学にゆかりのある着物を新しくデザインするという想定で、作成・プレゼンしてもらいました。

Wさんが選んだのは海の中を行く電車のお話でした。このような作成の課題をするときは、事前に昔の作品を取り上げて紹介した後に行うのですが、いろいろ遊びも入れられるよとか、帯が効果的に使えるよという話をしたのを、彼女は広げてくれました。遊びとして、あちこちに種々の海の生物を描き入れ、一番の工夫としては、これは作品を読んだ人には分かるそうなのですが、手前のシーラカンス、ここに文字が組み込まれています。なかなかよくやってくれるなと思います。しかも、帯を付けることで、浅い海と深い海の差がはっきり出てくるという、昔ながらの帯の効果まで考えたデザインです。

さらに2週目には追加の課題で、最初のデザインの「対」になるデザインをお題にしました。すると、同じ作品の違う巻で対にしたり、同時代の作品で対にしたりと、いろいろな発想が出てくるのですが、彼女はあさっての方向で対にしてくれまして、前回の海底に対して、陸上の家畜を持ってくる、面白い趣向にしてくれました。高校が農業系の所だったそうで、その知識や思い出も盛り込んだ上に、文字による遊びも、初回とは異なるテイストで加えてくれたりしました。

このように、皆さん工夫を凝らして、毎年いろいろ面白いのを考案して下さって、後生畏るべしだなと思います。

和菓子のデザインの課題もあります。これもシチュエーション物で、和菓子屋さんの若い職人の身になり、新作の和菓子について意見の割れた和菓子屋夫婦のどちらかの味方をして、そのオーダーに応え、しかも両者をうならせるような和菓子を考案して下さいという無茶振りです。

この場合はデザインと銘を考える必要があります。ここで紹介する方は（ご要望によりお名前は伏せます）、珍しいものを題材に選びました。なかなか渋い行事で、大工さんたちが工事の安全と速やかな進行を祈って、新年に行う儀式です。まずこのチョイスと、さらに祝意まで込められているのが、目の付け所の冴えているところだなと感じました。削った木の模様を前面に出している形状も、なんとも心憎い。これは本当に商品になりそうと思ったのですが、こういう素晴らしいものを考えてくれた人もいます。

こんな感じで結構、中には、クリエーター魂が爆発している学生さんもいるんですけれど、このような課題を通して、昔の人がどういう風に作ってきたのかなと、授業を聞いているだけではなくて、聞いたことを生かして、自分なりの工夫も凝らして考えてくれるので、お互いの良い刺激となって良かったなと思っています。それにしても、無駄に購入しているなんてひどいことを言われていたけれど、ここでちゃんと役に立っているもんね！　図録の山！　ということを、散々のたもうていた方々に言いたいですな。時に重みで床が沈んでも、芸術は素晴らしいわって（シバンムシに気をつけねば）。

さて、最後になりますが、一応「コツ」というふうにタイトルを頂きましたので、ちょっと口幅ったいのですが、研究を続けてきて思うことを述べます。大事なのは３つぐらいかなと思うのですが、まず、自分なりのスタイルとペースで続けるということだと思います。これは本当に人によっていろいろ、人生いろいろですね。すぐ思いつくところで言うと、結婚、出産、これは幸せでもあるのですが、研究にとっては盛大に足を引っ張ることにもなる場合があります。かといって、私みたいに独身で子どもがいなくても、それはそれで嫌みを言われたり、嫌がらせをされることもあります。暇でしょう、みたいな。そんなとき、気の重い出来事は起きる時には起き、どこに行っても世界には嫌な人がいるとは思うんですけれど、何かハプニングがあっても、何か言われても、自分が揺れないで、自分の心をヨシヨシして、心の手綱をうまく取って、楽しんで生きるのが、結構大事かなと思います。

そういうときに必要なのはサードプレイスですね。私、幾つか、喫茶店だったり、ラーメン屋さんだったり、仲間のいる所があるのですが、研究（仕事）と家庭、両方うまくいかないというと、それは地獄ですよね。そういうときの逃げ場所だったり、他にも私の生きる場所はあるぞっていう実感を得られる所、それをあちこちに作っておくと、自分を宥めるのに有効だし、嫌なヤツがいても、それで潰れることがないかなと思います。

あとは、面白さを感じられる研究をすることですね。よく研究のときに言うことですが、ここはまだこの分野であまり手が付けられてない、広げようがある、ゆえに研究しがいがある…そういう動機・視点ももちろん重要で良いのですが、それだけでやっていると、疲れちゃったりしますよね。自分が面白くて、これは追究し続けられるわ、喜んで本を読みまくれるわっていうのは、どこかなと。そこを選んでいくと、持続する活力になるかなと思います。

あとは、興味を貪欲に広げ、繋げることですね。これは研究に限らずですね。全然関係ないことをやっていたつもりが、アクロバティックにとんでもないところで繋がってきたぞという経験がいくつもありますので、これも大事だなとひしひしと思います。

専門分野それぞれに、見える世界がまた増えてくるのも、研究者として生きる楽しみ、面白さになるかなと思います。私はメトロの路線図なんかを見ると、戦国時代の合戦跡とか、江戸市中の図に重なって見えてくるので、楽しいなと思うのですが、これもまたご専門が違ったら、地層の分布であったりとか、地震発生箇所とか、いろいろ分野ごとのご興味で、別の面白さで目に映るのだろうなと思います。

自分の興味が思いもかけないところで研究に集約されて、そこで身に付いた面白い知識が、また新たな研究とか人とか場所とかと繋がっていくのかなと思います。資料に挙げたのは、ここもお茶大生の、ふらふら暇つぶしの定番の小石川後楽園ですね。これは非常に綺麗な写真を撮ったから見て！　という、単なる自慢に見えるのですが、実はこのような大名庭園といわれるお殿様のお庭、これが文学と関わりが深くて、随所に古典由来の名前が付いていたり、名前にちなむ風景が造られていたりします。それを眺めるだけでも、何だかいろいろ見えてくるものが増えたなと思いますし、右上の、これは例えば水に映って満月に見える、水戸藩のお抱えの儒学者、朱舜水のデザインによる橋なのですが、こういうものに着目すると、日本文学のみならず、中国文学の気配とか、儒学者の気配、あと、引いては兵学の要諦に通ずる点も見えてきたりと、また面白い。ちょっと町歩きにも繋がっていくところですね。皆さんそれぞれに研究を広げていらっしゃると、いろいろご自分なりの視界がさらに開け、楽しみが増えていくのではないかななんて思います。マニアックに学び、知識を蓄えて、自分だけが見られる楽しい風景を

手に入れましょう、なーんて。

　では、袖すり合うも多生の縁、ぜひ皆様のことも教えて下さいということで、研究に正解もないと思いますので、またそんな偉い立場でもないですし、実はここで質疑応答よりも交流をしませんかという提案です。研究をされている、あるいは、目指している、ちょっと興味がある皆様のことを、ぜひお聞かせいただきたく思います。研究テーマとか、研究以外でも、興味、関心、どんなお茶大生活を送っているとか、人生に深く絡む一冊、この本と私の今までの人生はこの辺がリンクしているかなとか、あるいは、来し方行く末、不安とか、いろいろお聞かせ願えたらと思います。もちろん何かありましたら、遠慮なくお尋ねいただければと思いますが、こちらで事務局の皆様にお戻ししてよろしいでしょうか。私の話は以上です。ありがとうございました。

（終了）